

## 「サイレント・ブレス」著者：南 杏子（みなみ きょうこ）

著者の南杏子氏は特異な経歴を持つ医師である。NHKの「あさいち」の番組にゲストで出演したのがきっかけで本書を紹介することとなった。結婚・出産を経て医師となり、都内の大学病老年内科に勤務するかたわら、2016年本書「サイレント・ブレス」でデビューした現役医師の作家である。

サイレントブレスとは、穏やかな終末期を迎えるイメージで、終末期医療をテーマにした物語である。

主人公は大学病院に勤める水戸倫子37歳。外来と病棟を診る分刻みの多忙の毎日であった。同僚からはちょっと要領よくやればと言われるが、倫子にはできなかった。

そんな時、大河内教授から「むさしの訪問クリニック」への異動を命じられた。小さな訪問クリニックへの異動は倫子にとって、全くの左遷であると落胆したが、引き受けることになった。

これまで、病気を治すための研究から、死に向かう患者の訪問医療に医師としての存在価値があるのかと悩んでいた。むさしのクリニックの常勤スタッフは、事務の亀井純子（亀ちゃん）と看護師の武田康介（コースケ）と倫子の3人である。管理責任者は大河内教授（非常勤）。

## 【スピリチュアル・ペイン】（終末期の患者の苦痛）

訪問医療の患者知守綾子（45歳）有名なジャーナリスト。7年前に乳がん手術を受けたが2年前から転移が見つかり、末期がん患者で緩和医療が中心となっている。（余命半年の診断で残りあと3カ月程度）

綾子は、自宅に「死ぬために戻った」と言い治療に積極的でなかった。綾子には時々訪れる謎のスキンヘッドの男正体が気にかかっていた。（死の直前に正体が判明）

綾子は、キューブラーロスの「死の受容」を知っているか倫子に尋ねた。綾子は、死を受容する五段階「否認」「怒り」「取引」「抑うつ」「受容」について解説書を書いていた。

綾子の最後の時も、スキンヘッドの男が現れた。その男は浄楼寺の日高春敬で、臨床宗教師であった。

綾子の死後、一冊の本が届いた。「死ぬ瞬間のデュアログ」著者は知守綾子と日高春敬。最後まで自分の死に向かい合って、ジャーナリストとして追及したのである。

## 【ロングターム・サバイバー】（長期生存者）

患者の紹介状に権堂勲（72歳）の名前があった。新宿医大の名誉教授で、外科学の元教授。消化器癌の権威として知られていた。わずかでも治る可能性があれば、最後までその光明に賭けて手術に挑む情熱的な姿は、何度もメディアに取上げられていた。倫子にとっては雲の上の存在であり、その人が末期がんであったという事実ショックを受けた。紹介者の大河内教授は、権堂先生は完全な治療拒否を通してということであった。

大河内教授から倫子に「点滴をしながらゆっくり死を迎えさせよ」言われたのである。

訪問初日、権堂から倫子に「君の所なら、うまく死なせてくれるって聞いてな」と言われさらに「治療は要らん。死ぬために戻った。こっちから連絡するまで来るな」と。一年半前に綾子に言われたのと同じ言葉であった。水分補給の点滴もしなければ、数日で急変する恐れがあった。

倫子は大河内教授に報告をした。その時、教授は「医師には二種類いて、死ぬ患者に関心がある医師とそうでない医師がいる。」「医師にとって死ぬ患者は負けだ」そして「よく考えごらん。人は必ず死ぬ。今の僕らには、負けを負けと思わない医師が必要なんだ」と。「死ぬ人を愛してあげようよ。直すことしか考えていない医師は治らないと知った瞬間その患者に関心を失う。だけど患者を放り出すわけにはいかないから、ずるずると中途半端に治療を続けて、結局病院のベッドで苦しめるばかりになる。これって患者にとっても家族とっても本当に不幸だよな。」「死ぬ患者を最後まで愛し続ける。水戸君には、そんな医療をしてもらいたい」倫子の心に深く残った言葉である。

ところが、権堂から呼び出しを受けて、点滴と痛み止めを要求された。権堂は「死ぬ前にやりたいことができた」と。コースケの運転で倫子は権堂に頼まれ、初日は大井競馬場。その次の週の土曜日は巢鴨地蔵通り商店街と多摩動物公園の二カ所。権堂は過去に自分で手術をした患者で、20年を経過し健康に暮らしているスーパー長期生存者たちがどんな人生をおくっているか自分の人生の最後にどうしても確認したかったのである。そしてその後は、再び一切の治療を拒み、3日後に静かに息を引き取った。

その後週刊ゴールドに「スーパードクター最後の仕事」に見出しで書かれていた。その内容は、癌の手術後20年以上にわたって健康な生活を送っている「スーパー長期生存者」を確認し、元執刀医として世間に報告しようというプロジェクトが編集・発行したのである。

そして権堂は、在宅で倫子に在宅医療に命を託したとある。大河内教授は、むさしのクリニックに推薦したのも権堂だといった。理由は、倫子が外来でいつも時間オーバーをしていたがクレームも少なく、患者が満足していたことを見ていて、適任者と判断したのである。見る人はちゃんと見ていたのである。

今回6話のうち2話しか紹介できなかったが、最後の6話は倫子の父の看取りである。紙面が足りなかったので省いたがぜひ読んでほしい内容である。

倫子は、上司である教授にも恵まれ大きな影響を受けたことそして小規模クリニックならではのストレートなスタッフそして取り巻きにも恵まれ、大学病院では経験できない経験と成長があった。